

すぎなみコミュニティカレッジ

講座：『実践に学ぶ！学校図書室ボランティアのコツ』

2003年5月22日～2003年7月10日 / 全8回開催

見学した学校：7校（小学校5校、中学校2校）

1) 導入講演：赤木かん子氏

学校図書室の現状とボランティアへの今後の期待を語る

2) 「学校図書室見学（1）福生市立第二小学校」

福生第二小学校の学校図書室づくりに関わる活動を通じてメッセージを発信する

本講座の目的

「子供の読書活動の推進に関する法律」が施行され、学校図書室の活用にも強い関心が寄せられています。この講座では、近郊の学校の見学を含め、子どもたちにとって使いやすく充実した図書室づくりを支援するために必要なことを学びます。

学校図書室ボランティアの第一歩は環境づくりへの協力です。書架の整理・整頓や蔵書の確認など、学校のニーズに応えるためには何が必要か？教育現場である学校を舞台に活動するためには守らなければならない約束もあります。まずは裏方に徹したサポートについて学びましょう。

全8回開催された講座のうち、第1回、第2回の赤木かん子さんの講演内容を特別にご了解をいただきまして公開させていただきます

2003年8月4日

主催：杉並区教育委員会

企画・運営：NPO法人 スクール・アドバイス・ネットワーク

ク

協力：杉並区学校教育コーディネーター

報告者：NPO法人 生涯学習 知の市庭

Vol. 1

導入講演 講師：赤木かん子氏

2003年5月22日(木) 10:00～12:00 於・阿佐ヶ谷地域区民センター
会議室

1. 主催者挨拶

生重幸恵氏（NPO法人 スクール・アドバイス・ネットワーク）

小学校・中学校の学校図書室が置かれている現状をよくご覧いただき、杉並区内で、どうしたら子どもたちがより読書に関心を持てるような環境を作れ

るかということ、皆さん方にお考えいただけたらと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

中曽根聡氏（杉並区社会教育センター）

この度の講座につきましては、いま生重さんからお話しをいただいた通りですが、すぎなみコミュニティカレッジは、ほかにも地域でITのリーダーとして活躍される方とか、子どもたちの環境学習を支援するなど、さまざまな課題に取り組んでいます。地域でさまざまな活動に取り組みたいとお考えの方々に、その入り口として、あるいは知識を増やしていただくために、社会教育センターの方で主宰をしている事業です。今年度は約15の講座を開催予定です。今後も、さまざまなテーマを企画しており、それらは「広報すぎなみ」を通して皆さんに紹介してまいりますので、ぜひ、また、他のテーマにもご関心を持っていただければ幸いです。今回は生重さん、平田さんにリードしていただくことになっております。何かございましたら、お二人にお話しをいただければ、私どもの方にも連絡が入りますので、よろしくお願いいたします。

池田芳子氏（杉並区立杉森中学校校長）

7月3日には本校に来ていただくことになっていますが、中学校としては、皆さんにぜひご支援をいただきたいと考えています。いま、私どもが一番困っていることは、学校に司書教諭を置くことが決まりましたが、その免許を持っている先生が学校図書館に関わることで、その分授業数が少なくなるということはありません。授業の合間に図書館の運営をするのは困難です。それが杉並の中学校の現状です。今日ここにお集まりの皆さんは、学校図書館にご興味をお持ちになっておいでになっていると思います。中学校の図書館には、本について話をすることが大好きな子どもたちが集まってきます。私は杉並の前には中野にありましたが、中野では全中学校に、週のうち何日か図書館ボランティアの方々が来られておまして、子どもたちの読書活動にご協力をいただきました。杉並区でも、ぜひ皆さん方のご支援をいただきたいと思います。これからあちこちの学校を廻られると聞いておりますが、せめて昼休みの30分間でも子どもたちと接していただけて、初めて中学生の実態とか、中学校の図書館についてご理解いただけることと思います。とにかく一度足をお運びいただきたいと思います。本の整理ひとつをとっても、まず現場を見て実態をご理解いただくことが先ではないかと思えます。

平田敬子氏（杉並区学校教育コーディネーター）

先に開催されました杉並コミュニティカレッジに「もっと知りたい身近な図書館」という講座がございましたが、今回の講座は、一般の公共図書館ではなく、学校の図書室に興味をお持ちの方々に応えるという意味で企画いたしました。杉並の小学校・中学校の図書室に関して学校の先生方と何度も相談を重ね、どのような形なら区民が学校の図書室に入ってゆけるのかということをお話

し合ってきました。

しかし、司書の資格を持っていたために司書教諭に任命されたけれど、学校図書室の運営にあまり興味がない先生もいらっしゃいます。また、図書室運営に積極的に関わりたいけれどクラスを担任していて時間がとれないという先生もいらっしゃいます。受け入れ体制があるところでない但实际上に区民が活動することはできません。良いことをするのだからと押しかけて行っても先方はお困りになるだけです。特に図書室の運営は個人情報、プライバシーに関わる部分がございますので、そこに入るためには信頼関係が前提となります。今回の講座のチラシには「裏方に徹したサポートについて学びましょう」といった控えめな表現を使っておりますが、まずはそこがスタートラインです。そして何年もかけて信頼関係を作っていくことで初めて学校に入る資格ができるのだと考えています。ですから、講座の中には、ご希望と沿わない内容も含まれるかもしれませんが、いまの時点で公立の学校でできる図書室サポートをメインに、この講座を組み立てていきたいと考えていますので、どうぞよろしくお願い致します。

2. 導入講演 赤木かんこ氏

赤木かんこ氏のプロフィール

法政大学英文科卒。子どもの本研究家。書評など著作多数。日本で唯一の本の探偵（子どもの頃に読んでタイトルや作者名を忘れてしまった本を探し出す）。図書館プロデューサーとして全国で活躍中最近の活動に関しては、右記サイト『赤木かんこの部屋』に詳しい <http://www.hico.jp/akagi/akagitop.htm>

導入講演 『学校図書室の現状とボランティアへの今後の期待』

ぶっちゃけた話、私は国の司書教諭政策にはむかついております。司書教諭が学校に来ても図書館はちっとも変わらない。それは時間がないといった問題もありますが、そもそも司書教諭さんに、きちんと図書館を運営できるだけの教育がなされていません。一番ひどいところは夏休みの3日間講習です。しかも、いま学校の先生は世代交代の時期ですが、20代の方達はほぼ全員が司書教諭の資格を取っています。司書教諭は免許ではなくて資格です。資格と免許の違いは何かというと、免許というのはそれが無い人がそれをすると罰せられる、車の免許が無い人が車を運転すると逮捕される、というものです。ですから、小学校においては教諭の免許がなければ授業を行うことはできません。大学になりますと教諭の免許は要りません。ですから、大学では、この人に教師になってもらいたいという人をどこからでも連れて来ることができます。

あくまでも司書教諭は資格です。その人が配置されて、たとえば、その人が1年間フルに図書館で働いてもいいよ、ということになっても図書館はさほど変わらないと思います。なぜなら、図書館を運営するには、それだけの知識と

経験とハウツウが要るからです。

ボランティアさんに運営させようというのはもっとひどい。ど素人を集めて博物館を運営しろというのと同じなんです。自分がその館長にならされたらどんな気持ちがします？ プロが一人もない博物館です。はっきり言って、図書館のルーティンワークは、ある程度の努力と根性と体力があれば何とかできます。でも、たとえば、この図書館をどのように運営しようとか、どの本を入れようとか、どの本をここに配置しようとか、そういう運営に関しては素人さんには無理なのです。

私は3年前から学校図書館のボランティアを始めましたが、きっかけは、私が福生市の図書館の評議委員になったことです。3か月に1度くらい会合があり、そこに市内のいろいろな人が選ばれてやってきています。私は、最初、この会合にはどういう意味があるんだろうかと思っていたのですが、ぜんぜん知らない職種の人、生活の時間帯が違うので全く出会わない地域の人などと話し合うと、結構、市の有り様が見えてくる。お互い顔と名前が分かるようになりますと、街の中ですれ違っても「あら、こんにちは」と挨拶を交わすようになりますよね。で、そんなかのひとつとして、たまたま小学校と中学校から代表が1人は来なくてはならないという、大変良いルールがあるのです。そのときに、私の学区であった福生第二小学校の先生が代表で来られておりまして、「一度うちの図書館を見に来られませんか？」と誘われたのです。私には子どもがおりませんので、自分の住んでいるところの学区が福生第二小学校であるということも知らなかったのです。行ってみて、「あ、ここは結構お金を持っているなあ」というのが分かった。本も十進分類に従ってきちんと整理されている。というわけで、全国の小学校から見れば、そこはAクラスの小学校でした。でも、床は茶色、本棚は茶色、机は茶色、壁も茶色、本棚はぎっしりと詰まっていてホコリだらけ...。見るからに「そこに座りたくないなあ」という部屋。で、「いまの現状では全国の小学校の中ではAクラスだけれども、図書館として見たらDクラスですね」と言いましたら、非常にながかりされまして「では、教えてください」ということになったのです。

でも、お掃除というのは、皆さんご経験がおありだと思いますが、一カ所をやりだすと一カ所では終わりません。これをここに片づけるためには、このものをどこかに移さなければならない...というわけで、結局ちょっとのつもりで最後までやってしまい最終的に落ち着くまでに1年半くらいかかりました。そして私は小学校教育から離れて長かったですから、とりあえずまず、子どもたちが何を習っているかが分からない。また、学校の先生は本のことは知りませんから、「どのジャンルがどれくらい必要ですか」というような司書にするような会話はできない。というわけで、五里霧中、霧の中から始めました。一体いまの子どもにはどのジャンルが、どれくらい必要なのか...と。そして、まず、一番最初に行ったのは廃棄でした。もちろん、本を捨てるというと先生方は怖がります。ところが一度、2千冊か3千冊ほど引き抜いた後、ひとりの子どもが、「先生、本が増えたね」と言ったのです。本は増えていませ

ん。逆に減ったのですが、汚れた、背の読めない本を片づけたので、自分たちが読みたい本が表に見えるようになったのです。それで先生がたは、捨てるの良いことがあるんだと分かってきました。

図書室はお店だと思って下さい。お店には倉庫が必要です。倉庫のものをすべてお店に出していたら素敵なお店はできないでしょう。ということで、図書準備室も整理しました。つまり、それまでの学校の図書室は倉庫状態だったわけです。倉庫ではなく、そこにお客さんを入れてくつろいでいただくと思うなら、お店を経営しなければなりません。イメージとしては「素敵な雑貨屋さん」を思い浮かべてください。素敵な雑貨屋さんにだって倉庫はありますといわれればその通りですが、その倉庫の品を全部出してしまったら、收拾がつかなくなりそうです。もしくは、ブティックをイメージしてください。その洋服屋さんに20年前の服しか並んでいなかったら、お客はだれも入りたいたとは思わないでしょう。確かに着られるじゃあないかとおっしゃるかもしれませんが、その服は着たくないのです。色あせて型が古くなっているからです。

本と図書館に関して、特に、日本で40歳以上の大人の人が、なぜ、このように間違えるのかということ、一番大きな原因は、この50年間で日本が急激に大きく変化してしまったということにあります。本というのは、その時代の人々の無意識の集合大成です。

物書きにはいろんな人がいます。良い悪いではなく、その時代に合った人がヒットします。凄腕の文学者で必ず文学史上に残る人でも、生きていた間には一冊も本が売れないという人は結構います。1冊は大げさにしろ、いまのSFの基礎になっているスタニスワフ・レムなどは、生きていた間はほとんど認められもせず褒められもしませんでした。彼が死んで、30年が過ぎ、ようやく世界がそういう人たちに追いついたのです。ですから、今ウケている本というのは、その時代の人々が必要とするものです。たとえば、ある一人の人が「こう書いたら今が書けるよね」と思って書いたものを、他の人たちも「そうだよ」と思う、読者がつく、沢山本が売れる。そうすると、読んだ人の中から同じタイプのものを同じように書く人が現れます。その作家が5人、10人、30人と増え、作品が千冊、1万冊、2万冊と増えてゆくと、ひとつのジャンルになります。そしてそのハウツーでは世の中が救えなくなったときに、そのジャンルは潰れてゆくのです。

特に子どもの本というのは大人の本に比べると息が長い。だから永遠に続くのだと思っている人が多いのです。でも、小説そのものがシェイクスピア以降ですから、たったの三百年の歴史しかありません。今の日本では、一つのジャンルがだいたい30年で潰れます。たとえば1960年代、何が流行っていたか、ということ、当時はSFの宝庫でした。それまでのSFは「スターウォーズ」のようなスペースオペラ、要するに格好良いヒーローが出てきて苦難に陥った美女を助けに行き悪漢が殺される、という単純な、西部劇を宇宙に置き換えたものと思われていたのですが、そこに思索と哲学を持ち込んだのです。だから、いま45、50、55歳くらいの人で本好きの人は、子どもの頃に大量にSF

を読んだらと思う。でも、現在、SFはほとんど力を持っていません。SFが唯一生き延びているのはどこかというハリウッド（映画）です。シュワルツェネッガーの作る映画の半分はSFです。「ターミネーター」はSFです。そういう形では生き残りましたが、いまでは活字としてはほとんど力を持っていません。ですから、そういう本しか図書館に並んでいなければ、お客さんは来なくなるのです。

図書館の仕事と司書というのは、日本の仕事の中でもものすごく説明がしづらいジャンルのひとつだと思います。図書館で働いている人でさえ、「司書ってどういう仕事？」と尋ねられたら一瞬答えに窮するでしょう。なぜなら、司書はありとあらゆる仕事をしているからです。泣いている子どもがいたら抱き起こし、怪我をしていたら絆創膏を貼ってやり、ゴミが落ちていたら拾い、大道芸人もやり、帳簿もつけ、本の注文をし、金勘定をし、そして図書館を運営する。という仕事を一言でどう説明しようかと思うと、頭の中がグルグルします。

本だと思うから分からなくなるのです。だから、雑貨屋さん、もしくはブティックだと思っていただくと、特に女性の方はイメージしやすいということが分かりました。

たとえば図書館では仕入れ、どんな本を買ってくるかは非常に大事です。ブティックの仕入れ主任も、その店の方向性と今年の売上を一身に背負っています。なにせ、店が小さい。世の中のありとあらゆる服を買ってきて入れたら、売上が伸びておもしろい店になると思いますか？ ならないでしょ？ 店が小さければ小さいほど、その店が持っている性格は規定されます。特に洋服というのは、ほとんどのお客さんは、「この服は、何歳くらいで、どういう仕事をしている人で、どういう考え方をしている、どういう顔立ちの人が着るものか」ということが分かっています。レベル的にも3枚で千円のパンツと一着40万円のドレスは決して同じ店には置いてありません。

またショーウィンドウというのは、お客さんを振り分ける、篩（ふるい）みたいなものです。ショーウィンドウを見て、「ここは私の店ではない」と言って去って行く人と、「ここは私の店だわ」と思って入ってくる人を篩い分けるためにショーウィンドウはあるのです。そして、ブティックのハウスマヌカンさんは、入ってきたお客さんを一瞬で見抜きます。「この人は美容院でいくら使っているのか、どのレベルの美容院に行っているのか、今この人が着ているものは上から下まで併せていくらなのか。靴はどこのメーカーか、服はどこのメーカーか。一体この人は、何の目的でこの店に入って来たのか」。そして次の瞬間には頭の中で倉庫の物品情報をめくるのです。「今この人に着せて帰らせる服があるだろうか」と。だから、皆さんが「こんにちは」と言い、向こうが「いらっしやいませ」と応えたときには、優秀なマヌカンさんだったら、もう皆さんが買って帰る服は決められているのです。

人の顔立ちはさまざまです。ですから、ある人に似合う服が他の人に似合うとは限らない。もちろん、そういう職業に就く人は基本的にファッション・セ

ンスが良い。ファッション・センスが悪いマヌカンさんというのは売上が伸びないのでクビになるでしょう。本人も働いていて気持ちよくないです。右も左も分からないわけですから。私自身はビジュアルセンスが無いので、絶対洋服屋さんにはなれない、ということが分かっています。また、数字を合わせるのがヘタなので銀行員にもなれません。人間には皆、向き不向きがあります。向かない仕事に就くと一生不幸です。自分が無能だと思いながら生きていくのは大変辛いことです。できれば「あなたは優秀ね」と言われる方が、周りにとっても本人にとっても幸せに決まっています。

だいたいマヌカンさんは洋服が好きで、ブランドだったら、そのブランドの好きな人になります。そして、そのブランドの服が似合う人が店に立ちます。もちろん、40歳代の人のための洋服を売っているお店のマヌカンさんは40歳代です。マヌカンさんというのはそのブランドの服を着て、こうやって着るのよ、と歩いて見せて、「あら、あの人素敵ね!」と思わせる、生きたモデルのようなものです。その人が格好悪かったら、だれも買いたいとは思わないでしょう。そうして、そこにある服がみな、皆さんに合うわけではありません。センスの良い、能力のある人は、その人の顔立ちや体つきを見て、「この人には、あの服が似合うな」ということが分かるわけです。それが一番の基礎です。それが分からなければ、その商売はできません。

そういう方は、たぶん、お客さまに似合う服を着せて帰りたいという欲求をもつでしょう。しかし、ブティックは、そのマヌカンさんよりも、客の意向を優先させなければなりません。お客さまが、その人に絶対に似合わない服を選び、それを買ってゆくといい張った場合、マヌカンさんには手も足も出ません。なぜならば、ブティックでは、マヌカンさんの満足度よりお客さんの満足度の方が優先されるからです。客が満足すれば良いのです。

お客さんの能力もバラバラです。ものすごくセンスの良いお客さんもいます。そういう人がすべてデザイナーやマヌカンさんになるわけではなく、そういう才能を持ちながら、そういう仕事に就かなかった人もいます。そういう人は、マヌカンさんにとって、ほぼ同志のようなものです。何もしなくてよいのです。自分に似合う服を自分で選ぶ能力を持っているからです。だから、その方とは対等にしゃべることができます。だから、「この秋にはこの服が流行りますよ」と情報を流しておけば、「あらそう、じゃあ9月になったらまた来るわ」という友だち同士のような会話が成立するのです。一番おもしろいのは、ものすごくファッション・センスの悪いお客さんが、オドオドしながら入ってきて、その人はこれまでの人生で、自分には才能がないということがよく分かっています。「でも、明日知人の結婚式だから、ぜったい今日一着買ってゆかなくてはならないの」と切羽詰まってやってきて、でも、右を見ても左を見ても、どれが自分に似合うか分からない、という人にちゃんと似合う服を着せて帰すことでしょう。でも、その人はセンスが悪いので、マヌカンさんが着せてくれた服が自分に似合うということも分からないのです。センスがないというのはそういうことです。似合わないことが分からないだけでなく、似合う

ことも分からないのです。でも、洋服という人目につきます。その洋服を着て、オドオドしながらでも結婚式に行くと、たぶん、他の人が「あら、いいわねえ」と言ってくれる。「素敵ねえ、似合うわ、どこで買ったの?」と言われると気分が良くなります。次の日にお店にやってきて「褒められた!」と大声で言うでしょう。こうなると、この人は、そのマヌカンさんを信頼します。

「この人は私のことを分かってくれる」という深い思い込みを持ってくれる。そうすると、その人はリピーターになる。

そういう客商売というのは、一見さんを満足させることが目的ではなく、いかにリピーターを作るかが商売繁盛の分かれ目になるのです。だから、そういうお客さんをたくさん持っているマヌカンさんが店を異動すると、お客さんも一緒に異動します。お客さんは、そこで10万円のドレスを10万円で買うだけでなく、その人のファッション・センスにお金を出すのです。

才能のある人はバーゲン品を漁って、自分に似合うものを探することができます。でも、才能がなかったら、お金を払って、人の才能を買うのです。その才能代が洋服代に入っているのです。だから、絶対似合わないと思われる洋服を強引に買ってゆかれるお客さまを相手にするのは楽ですが、ストレスが溜まります。「お客さまが、そのサーモンピンクをお召しになるとブタに見えますよ」とは口が裂けても言えません。そんなことを言ったら、二度とそのお客さんは戻ってきてはくれないうでしょう。本当のことというのは人を傷つけるのです。自分の満足よりお客さんの満足を優先させるのが客商売です。人に対して「それは似合いませんよ」と言うことは失礼にあたります。そういうことは言っははいけないのです。

図書館にはいろんな図書館があり、図書館員にも、細かく言うとさまざま職種があります。集める本も運営方法も違います。たとえば、医学部付属の図書館が持っている本と、工学部付属の図書館が持っている本は、ほとんど重ならないでしょう。また、医学部付属の図書館に勤めている図書館員はドイツ語と英語がある程度できないと仕事になりません。医者や看護婦がカウンターで早口に言う言葉が頭の中でチャッチャと漢字や英語に置き換えられて、病気の名前に換算されないと仕事になりません。ですから、そういう関連の基礎知識が必要になります。医学系の図書館に勤める図書館員は医学の基礎知識を持ち、かつ、図書館を運営するだけの司書としての能力を持っていないと成立しません。児童館の図書館で働く人は児童書について知っていて、かつ図書館の運営ができないと務まりません。

一度、プロテスタント系の図書館に行って、のけぞって驚いたことがあるのですが、そこはキリスト教系の学校で、神学を教えています。神学、哲学、心理学の本が山のようにありました。しかし、文学はゼロに近く、自然科学の本は、ゼロでした。ダーウィンは“異端の教え”という棚に入っていました。一方、マルチンルターという棚には数え切れないほどの本が並んでいる。だから整理(分類)しなければ使えません。マルチンルターについて書いてある本、マルチンルターについて誰々が言っている本というように細分化されているわ

けです。キリスト教に対する基礎知識がなければ、そこでは仕事はできません。同様に、中学の図書館で働く人たちは、中学生が読む本について知らないと話になりません。小学校で働く人は小学校の子どもたちが読む本について知らない話にならない。

洋服について詳しいからといってブティックで働けるわけではありません。洋服について詳しく、かつ商売もできなくてはなりません。大きな店になると分担ができます。大きいブティックなら、仕入れをすると人と売り子さんは、まったく別に存在できます。売り子さんは売るだけでよいのです。経理ができなくとも、お店を経営する能力がなくても、お客さんときちんと対応ができ、その人に似合う服を買わせる能力があれば十分です。でも小さくなればなるほど、一人でありとあらゆることをやらなければなりません。個人商店は本当に悲惨です。なぜなら、個人商店というのは、お客がいる間は、言い方は悪いですが、仕事になりません。客の相手をしなければならぬからです。いつ商品を仕入れるか、いつ帳簿をつけるか、それは店を閉めてからになります。朝10時から夕方の6時まで店を開けているとしたら、その間は裏方の仕事はできませんから、6時に店を閉め、帳簿をつけて店を出るのは夜の10時になります。

今、小学校や中学校の図書館で、ボランティアさんに1日3時間とか4時間来ていただくという話が結構ありますが、はっきり言って、何にもできません。子どもが学校にいる間は仕事にならないのです。個人商店ですから、店主は1人しかいません。目の前に子どもがいたら、子どもと対応しなければいけない。ほとんど4時間しゃべりっぱなしです。

世間では、特に公共図書館の司書について大いなる誤解をしています。専門図書館や大学図書館の司書のイメージと、公共図書館や学校図書館の司書のイメージがだぶっているのです。公共図書館や学校図書館は一般の人を相手にする、要するに個人経営のブティックのようなものです。カウンターに、のべつまなしにお客さんが来ます。

いま私がボランティアをしている学校では、どのクラスでも毎週1時間読書の時間をとっています。その時間は図書室に来て本を読むのですが、その時に本の貸し出しもします。半分かくらいの子どもは、その時間に2冊程度本を借りて返すだけで満足しています。もっと読みたい子どもは授業の合間の20分休みとお昼休みに来て本を借り替えて行くわけです。40人が貸し出しと返却をします。はっきり言って図書委員は本を読むヒマはありません。だから、図書委員の子どもたちも本が読めるように、読書の時間には先生がその子たちの代わりをします。コンピュータはフル回転です。月曜日の1時間目から5時間目まで、月曜から金曜までほぼフルに埋まっています。そうするとコンピュータが空かないので、私達ボランティアが新しい本にマークを打ち込むヒマがありません。いまの私達の悲願は図書準備室にもう一台新しいコンピュータが欲しいことです。

いま新学期で、1年生が79人入ってきました。彼らは好奇心旺盛です。特に

今年は体格が良く頭が切れ、口が達者で、行動力があります。学校中走り回って探検しています。図書館にも、もちろん来ます。1年生なのに字が読めます。「ドラえもんだあ～！」と叫んだ途端、ドラえもんの本は棚からすべて貸し出され消えてしまいました。

今、お天気の良い日にも20分休みに、図書館に130人から150人の子どもが来ています。図書委員は必死になって貸し出しと返却の対応をしていますが、休み時間内には終わりません。高学年の子どもは図書館になれているので、「いま借りられなければいいやあ～」と棚の本のうしろに隠してとっと帰ったりしますが、1年生と2年生は「絶対にいま借りたい！」のです。だから、そこで泣き出してしまう子どももいるので、図書委員は「あっ、授業が始まってしまう…」と時間を気にしながら貸し出しをしているわけです。先生が気づいて飛んできて、代わったりもしますが、その先生にも授業があるんです。1時限目から5時限目まで、怒濤のようなというか嵐のような1日です。ですから、その間にはバックヤードの仕事はできません。学校の先生方が“帳簿”をつけるのは、子どもたちがみんな帰り、「ああ、やれやれ」という午後3時から後のことです。

学校の教師もブティックの一人店主のようなもので、“お客様”がいる間は仕事にならないのです。ですから、パートで「1日4時間図書室に勤務してください」と言われても、「一体、その4時間何をやれと言うのでしょうか」というのが正直な感想です。掃除をしたり子どもたちの相手をしていれば、それでよいというのでしょうか。でも、それは図書館を運営しているとは言わない。

またボランティアには権限というものがありません。たとえ「こういう本が必要だ」ということが分かったとしても、教師の方が「じゃあ、その本を買いましょう」と言ってくれない限り、権利がないのです。

ようやく1年半かかって、小学校の図書室はこうしたらうまくいくというハウツーができました。子どもたちは基本的に本が好きです。世間で「最近の子どもは本を読まない」とエラソーにふんぞり返って言う大人は悪い人です（笑）。なぜなら、その言い方というのは「本を読まない子どもが悪い」と言っているからです。では、そう言っている人は、この1週間で何冊の本を読んだのか？ と言いたくなります。正直言って、本を読みたがらない大人に本を読ませるより、本を読みたがらない子どもに本を読ませる方がはるかにカンタンです。だって、本当に子どもたちは本を読みたいのです。なぜそこで食い違うのかというと、子どもたちが読みたいと思う本と、大人が読ませたいと思う本が違うからです。

人間はどうしても若い時の記憶に縛られます。100年間文化が変わらない、戦争もない、大きな経済恐慌もないという時代が続いた時には、人々の精神状態は大きく変わることはありません。そういう時代には同じ本が長生きします。

しかし、最初に言いましたように、本というのはその時代の人々の意識の集

合体ですから、生活様式が変わり、ものの感覚が変わってくると前の本は使えなくなります。明治維新の前と後とでは人々の感覚が変わったでしょう。江戸時代に作られたものは特に明治初期にはほとんど使えなくなっただろうと思います。それから100年も経つと、優れたものはまた別の形で蘇って来たりしますが、とりあえず怒濤の変化の直後は一番近いものは一番古く感じるので使えない。

いまの40代50代の人には1960年代1970年代に大きくなりました。日本の近代的な児童文学はその時に始まりました。戦争の後遺症から立ち直り、少しお金ができ、岩波、福音館、学研、小学館、講談社などが張り切って子どもの本を作ってくれました。いまの40代50代の人はその恩恵を浴びて育った人々です。何もなかったところに、カラフルなものが降ってきたのです。みんな夢中で読みました。そのころの翻訳は無茶苦茶です。17世紀も18世紀も19世紀も20世紀も、どれでもいいから訳したようなものです。ても、みんなおもしろかった。日本の作家も出てきました。小松左京も星新一も、作家たちはみんな20代だったのです。「スーパージェッター」というアニメを作ったのは星新一と筒井康隆と小松左京です。「SFを作りますよ」という企画書を出して通ったのに、タイムマシンを登場させたら、「こういう荒唐無稽なものは許可できない」と言われたそうです。「こういうのをSFというのですよ」と言って上を説得するのにすごく骨が折れたとか。

マンガもアニメーションも始まりました。百花繚乱です。どれを見てもおもしろかった。ですから、そのとき本を浴びるように読み、「子どもの本っておもしろい」と思った人が、将来、児童図書館員になったり教師になったり、文庫のおばちゃんになったり、編集者になったり、作家になったりしました。

本当のプロというものは、年を取ってもあまり衰えないものです。プロのファッションデザイナーの人は70歳になっても同じ年頃の人に比べてはるかにファッション・センスが良いでしょう。でも、「25歳の若いデザイナーには太刀打ちできない」と思う時がやがて来ます。そこで、パッと引退できる人というのは能力の高い人です。92歳で現役という人もいないわけではありませんが、話題になるほどごく稀なことです。

同じ文化がずっと続いているときには72歳は長老でいられますが、その70年間の間に大きな落差が何度か起きると、乗り越えられない時に、その人は現役ではなくなります。日本は1970年1980年1990年と文化的な大きな落差がありました。その度に、「もうこの本は使えない」と言われて落ちていった本がありました。優れている本だから生き延びる、そうでない本だから生き延びることができない、というわけではなく、本は必要であるか必要でないかで落ちます。ですから、翻訳されてから何10年も少女小説第一位だった「若草物語」は80年代にお亡くなりになりました（笑）。「若草物語」は“質実剛健”です。破れたドレスはツギを当てなさい、という世界です。バブル期に浮かれていた女の子たちには、それは「ケッ！」という世界です。この物語のなかでお父さんとお母さんは子どもたちを可愛がっています。しかし、60年代から、日本の

子どもたちには愛情不足が激しくなり、84、85年にそれがピークになり、表にそれが出るようになりました。日本でそれを一番最初に書き始めたのは少女マンガ家です。1969年、1970年、1971年の間に大島弓子（おおしま・ゆみこ）、萩尾望都（はぎお・もと）、山岸涼子（やまぎし・りょうこ）というデビューの時からトップで、その後もずっとトップという大物3人が同時に世に出ました。この3人が描いたのは、いつも“児童虐待”です。1970年にはまだ児童虐待は世間一般には理解されませんでした。だから、彼女たちの作品をすごい、すごいと思って読んでいたのは児童虐待の被害に遭った人たちでした。「私の気もちがどうして分かるの？」と。ところが1980年代に入ると、そういうAクラスの作家たちだけでなく、BクラスもCクラスの作家たちも児童虐待をテーマとして扱うようになりました。BクラスもCクラスも描き始めたというのは“コップから水があふれた”ということです。物事は一朝一夕には変わりません。だんだん、だんだんに溜まってゆき、ある日突然破れるのです。だから、破れることが分かっている人は「危ないぞ！」と言いますが、フツの人々は、「そんなバカなことがあるはずがない」と言います。水があふれてから初めて慌てるわけです。「だから言ったじゃないか」と言っても人は動かない、というのがフツです。

1984、85年ころになると少女マンガのどのページを開いても、「私を見て！」「私を愛して！」「私にかまって！」...になりました。若い人たちは、それは自分自身の問題ですから、すぐに気づきます。しかし、歳が上になればなるほど、それは自分の問題ではありませんから、新しいテーマに関して気づくのが遅くなります。ですから、親がまともに子どもを愛しているという内容の本というのは古いものになりました。

1980年代のトップスターは「赤毛のアン」です。この小説は60年代から翻訳され、自分が愛情不足だった女の子たちに支持され、徐々に売上を伸ばして行きました。でも、「赤毛のアン」が書かれたのは1908年です。そうして、作者のルーシー・モード・モンゴメリに、どうしてこの小説が書けたかという、本人が重傷の“アダルトチルドレン”だったからです。たぶん、彼女の周囲にそのことを分かってくれる人は少なかったでしょう。彼女は自分の皮膚感覚だけを頼りに書いたのです。それは見事なくらい現代の心理学の本と一致しています。その古い本が、日本の子どもたちがこぞって愛情不足になったとき、アン・シャーリーはヒロインになりました。モンゴメリは、あの本の中で作家が犯してはならないタブーを破っています。それは、登場人物を「この人はこういう人よ」と規定することです。本来作家は、この人はこうよと書くだけで、それをどうだと決めるのは読者の仕事です。なのに、モンゴメリは赤毛のアン・シャーリーはこういう人間だけれど、愛すべき存在であると言い切っているのです。

私は子どもの頃、シャーリーが大嫌いでした。「こんな人が自分のクラスにいたらたまったものじゃないわ、お守りするの...」という思いでした。でも、愛情不足で、自分がアン・シャーリーだと思える人にとっては、アンが愛

されるなら自分だって愛されるかもしれない、なのです。でもアン・シャーリーも1990年代に入ってお亡くなりになってしまいました。なぜなら、子どもたちにはもう分かってしまったのです。アンを救ったのは、彼女をまるごと、そのまま愛したマシューです。でも、マシューは、世界のどこにもいない。だから自分は救われない、アンにはなれないと。ところが、いまの小学校の教師は40代が中心です。彼等は赤毛のアンを読んで大きくなりました。この本はおもしろいと思っています。だから、まだ新刊を買うのです。いま、学校の先生に「赤毛のアン」と「シートン動物記」をいかに買わせないかが私の仕事です（笑）。予算が600万円もあれば買ってもいいんですよ、でも30万円しかないのです。フツウの人が聞けば、30万円もの本が買えるのかと感心します。しかし、日本の図書館の本棚は1段は90センチで作ってあり、あれを1段8万円分で計算します。分厚い本なら35冊、薄い絵本なら60冊くらいが入ります。だから、それをならすとだいたい8万円くらいなんです。とすれば、5段書架だと、掛ける8万円です。本棚1本で40万飛ぶのです。予算が30万円しかない図書館の場合には1本分も買えないということです。

この前、自然科学系の本で、いま欲しいなあと思う本をざっと計算したら170万円になりました。いま、小学校の図書室をきちんと整備しようと思うと650万円が必要です。でも、たかが650万円ですよ。公務員の給料1年分に過ぎません。政府は人もくれず、金をくれず、やり方を教えてもくれずに図書館をボランティアに作れと言っているんです。

図書館の掃除ひとつにしても大変です。掃除なんかカンタンだよと言うのは、カンタンだと思っているだけで、したことがない人です。日頃から家事をしている男は、そんなことは口が裂けても言わない...。だって大変さが分かっているからです。イザとなれば家のことくらいオレだってできるさ、と言う男は、実はやっていないと思っています。

でも、目の前には目を輝かしたボランティアがいます。何の知識もない、しかしやる気だけはある、かつ、そこそこに有能な...。これを使わない手はないぞ、と半面では思うのですが、どうやって使ったらよいのか。だって知識がないんだもの...

小学校の図書館には限りがあります。小学生に限りがあるからです。ここから先は難しく読めないよ、ということがあります。ですから、大人の本と違って果てがない、ということはありませんが、その中ではきっちりとやらなければなりません。子ども対象のレファレンスは大人より大変です。「ゴキブリの触覚の絵が見たい!」とか、こちらが戸惑うことの連続です。「火鉢の中にどうやって炭を入れるの?」と聞かれて、「どこかに書いてあったよね...」と悩んだりします。小学校では1万5千冊の本を把握していれば仕事ができます。でも、それら1万五千冊の隅から隅まで知らないとはダメなのです。この1万5千冊を毎日10冊ずつ覚え込むとして計算すると丸々5年間かかります。大学1年生のときに、私は学校図書館員になるんだと決めて、本気で勉強しないと間に合わないという分量なのです。本が分からない図書館員というのは片腕

をもがれたようなものです。服が分からないブティック店員と同じです。大きな会社なら、それでも、やる気と能力があれば使い道があります。でも、個人商店では何もかもできる人でないと務まらないのです。学校図書館の一番困ったところは何かというところ、「あっ」と思ったときに相談する相手がだれもいない、ということです。自由な代わりに何もかも自分一人でやらなければならない。その人に能力があるかないかがくっきりと出てしまいます。しかも、能力が高く、やらなければならないことが見えれば見えるほど仕事が増えます。能力が低く、やらなければならないことが見えなければ、遊んでいても務まるのです。

いま、日本の学校の図書館がひどい状態なのは、ひとつには高校の司書に無能な人が多いからです。有能な人もいますが、訓練されていないことが大きな要因です。高校の司書が大活躍していて、ここ20年間、子どもたちが「司書がいると役に立つんだ」と実感して卒業して行ってくれば、いまの30代40代の親たちも、学校には司書が必要だと思ってくれたでしょう。そう思っていないのは、彼等が卒業した高校に優秀な司書がいなかったということです。ですから、学校の先生方にも、図書館に一人司書がいると、どんなに物事がスムーズに運ぶかということに納得してもらおうのが非常に難しい。それは当然ですよね、司書がいたことがないのだから。その反対に、司書なんか入れたら、私の仕事が増えると思う先生が多い。特に中学校はそうです。

今までだいたい35校くらいの図書館作りに関わってきましたが、私が改装できたところは、全国5万くらいある学校の中ではほんの一握りです。どういう学校で改装が成功したかということ、校長と教頭にやる気がある、図書主任が本が好きで、自分自身が汚い図書館にいるとイライラするので何とかしたい、あるいは、いままでさんざん苦労してやってきたけれど、自分には能力がないからお手あげだときちんと認めるところ、かつ、他の先生は無関心もしくは関与しない、邪魔しない...というのが条件ですね。手伝ってくれなくともいいのです、邪魔さえしてくれなければ、ね。失敗したところでは、強行に邪魔する教師がいるのです。いま中学の図書館で一番抵抗が大きいのが「マンガなんか入れるな」ということですね。自分が子どものときの記憶で言っているのです。いまのマンガについて勉強していないのです。よく外国の人が日本に来て、「日本では大人がマンガを読んでいる！」と驚きますが、アメリカでマンガといえば、バットマンとスパイダーマンくらいしかない。アメリカにも日本の手塚治虫のような存在であるディズニーがいましたが、日本は貧乏だったので、紙と鉛筆さえあれば作れるマンガに走ったのです。しかも、日本人はとても器用だった。いまの現代文学の中ではS、Aクラスはみんなマンガです。活字の方はB級、そしてC級なんです。マンガの方は、SクラスからGクラスくらいまで揃っています。ですから、活字の本しか入れないということは、BクラスとCクラスの本しか入れないということになります。ですからマンガを入れるなという人は、はっきり言えば教養がなく、かつ文学的素養がないんです。だって、どんなジャンルにだって天才がいて、その天才が書いたものがあるん

ですよ。そういう人に「では、手塚治虫は？」と聞くと、「うっ」と詰まって、彼なら良いと言うのです。そこで、「では手塚治虫の何と何を読んでいますか？」とさらに突っ込むと、たいてい返事がない...

なぜ学校図書館が良くならないのか、それは学校を預かっている教師が本に関して勉強していないからです。でも、教師が勉強をするのは不可能だと私は思います。学校では、いつも先生は走っている、忙しいのですよ。朝の8時半から40人の生徒を相手にしていれば、終わる頃にはぐったりします。人間一人あれだけ働けば十分だろうと私は思います。

その後に帳簿つけがあるのです。ですから先生には早く帰って寝て欲しい。そうでないと朝の8時半に元気に来てもらえないから。月曜日に会うと元気なのですが、水曜、木曜となるにつれ、先生方の顔がだんだん土気色になってゆくのです。1日元気で子どもたちと格闘するには8時間ちゃんと寝ないとダメなんです。この上、先生方に本を読めというのは辛いなあと思う。先生は、学校図書館においては優秀な使い手であればよいと思います。子どものことを把握して欲しい。「うちのクラスは、今こういう状況で、だから、私はこういう方向に持って行きたいのだけれど、それに使える本はないか？」と司書に相談してくれれば十分だと思います。

私も学校図書館に関わった当初は、先生から「次の時間、ぽっかり空いたから、何かいい本はない？」と言われて10冊とか15冊とかを渡していました。でも、それだけの冊数の本を出すと、一瞬、先生の顔がくもるのです。そこでハッと気づいて、3冊しか渡さないことにしました。3冊なら、その本を持って教室に帰る間にパラパラとページをめくれば、どういう内容か把握できますよね。3冊のうちどれを読んでも、そのクラスで“当たり”という本を選んでおけば、後は先生が気に入った本を選んで読めば大当たりということになるではないですか。司書が学校に入った当初は、こういった失敗が多いのです。司書は司書同士のやりとりに慣れているので、つい、学校の先生も同じだと思いがちです。そうではなく、学校の先生は本に関しては素人さんで、図書館のカウンターに来る一般のお客さんと同じであることが飲み込めたら、学校で働くことができるようになります。

相手に無理はさせない。疲れさせてはならない。相手の役に立つように動く。図書館としては、それが正しいやり方です。相手を苦しめるようなことはしない。先生方を楽にするために学校司書が存在するのです。楽にしてあげなければ良い授業はできませんよ。先生方が楽になり、より高度な内容の授業ができるために学校司書が必要なのです。しかし、それを実行するためには“商品知識”が必要です。でしょ？ ただのお掃除おばさんにはできないよね？ お掃除するにもコツはあるんだけど...。でも、ある程度有能な人であればお掃除は覚えることができるでしょう。

後はブレーンの存在です。学校に行ってみて、図書主任がそのブレーンになるだけの能力があれば、「やったあ！」と思うのです。そこの図書ボランティアに一人、「この人なら図書館に就職してもきちんと働けるなあ」と思える人

がいればラッキーです。後は必要事項だけ時々連絡しておけばチャッチャッと働きます。ブレンが一人いて、手足になって働いてくれる優秀な人たちが4、5人いれば学校図書館はうまく回ってゆきます。でも、ブレンがいないとどうしようもありません。ブレンになるには勉強することが必要です。いまからなら、必死になってやらないと追いつきません。なぜかという、いま本が様変わりしました。書店に平積みされている3分の2の本は1990年以降にデビューした作家たちの本です。いまの売れ筋はそうなんです。1980年代は新しい時代に入るための過渡期でした。バブルがはじけて世の中は変わりました。生活様式が変わると意識が変わります。いまの小学校6年生は1991年の生まれです。いま売れている作家のデビューの年を見ると1995年とか1996年、1997年です。新しいタイプの作家が新しいタイトルの本を書く。内容も新しいものです。読んで理解できる、とは限らない...。いまは引越の後のような大騒ぎの最中にあります。40代の方は30年間培ってきた知識が今までは役に立った。でも、ここ10年、じりじりと役に立たなくなってきた、もうここ3年ばかりはお手上げ状態なのです。バックボーンの知識はある、でも最前線の知識がないのです。一方、いま入ってくる20代の若い教員には最前線の知識はあります。彼等は現役ですから。その本たちと一緒に大きくなってきたわけです。その本が直におもしろいんです。でも、彼等はバックボーンの本を知りません。だから、いま20代の人たちと話をしていると、どこかでスコーンと抜けるんですね。ランポーの「モルグ街の殺人」を読んでいない、シャーロック・ホームズも読んでいない。名前はもちろん知っていますけどね。“世界名作”を知らない。“日本名作”も知らないのです。いま、20代と40代の司書は頭をつきあわせて「ねえ、ねえ知ってる？」なんて、お互いの知識を交換しながら仕事をしているような状態です。過渡期ということは、それだけ新しい本を覚えなければなりません。

一番おもしろいのは中学で、一番大変なのも中学です。ここ3年何が変わったか。小学校5年生になると“ヤングアダルト(YA)”になります。ヤングアダルトというのは、まだ大人になっていない人たち、という意味です。図書館業界では、中学生と高校生を指して使う言葉ですが、世間一般がこの言葉をどうとらえたかという、 “20代の人たち” という意味だと理解しました。なぜなら、その頃、日本の20代たちはもう大人ではなかったからです...。1984年85年に、これはまずいと思って、私がヤングアダルトという定義を作り出したときに、「あなたは大人ですか？」と尋ねて、「大人だ」と思う人はアダルト、もしくは、「失礼な！」と怒る人もアダルト、一瞬「うっ」と詰まる人はヤングアダルト...と定義をしたのです。そしたらもう東京では45歳くらいまでほぼ全滅でした。下手すると、いまは55歳くらいまでヤングアダルトです。

当時のヤングアダルトの旗手はといえば新井素子(あらい・もとこ)などです。最初の頃は数が少なかったのがよかったです。ヤングアダルトの山が大きくなると收拾がつかなくなります。ある程度分量が増えると、もう一度分類する必要が出てきます。人間が把握できる分量というのはある程度決まって

います。その分量を超えると認識できなくなりますので、そこでもう一度分類することが必要になります。

いま図書館でヤングアダルト・コーナーを作りますと、20代と30代で仕事に就いていない人が1年中そこにいます。そうすると中学生がそこに入れません...。15年前は、ヤングアダルト・コーナーは中学生のために作れば小学生も入ってきました。だんだん上の年齢の人が入り始めたわけですね。また新聞雑誌コーナーにはおじいちゃんがあります。児童コーナーに行くと特に男性は“変態”扱いされます。ですから、いまちょっと人口の多い街の図書館ですと、ジュニアのヤングアダルト・コーナーとシニアのヤングアダルト・コーナーに分けなくてはならなくなってます。そういう場所を作ってあげないと中学生がいるところがない。上の年齢からだけでなく下からも入ってきますから、いま小学校5年生くらいからヤングアダルトです。

「ずっこけ三人組」は大人に守られています。子どもたちに何かあったらお父さん、お母さんが飛んできてくれるのは分かっています。そういうのを子どもたちは、すごく古く感じるのです。

特にここは東京のど真ん中です。日本で最先端なわけですが、精神文化的には、良い意味でも悪い意味でも。

洋服は着る人に似合わなければ使えない。きつ過ぎてもダブダブでも気持ち悪い。だから、その図書館をどう作るかは、その図書館を利用する人たちがどういう人たちにかかってくる。だから、同じ本でも、この学校の図書館には入れるけれど、この学校の図書館には入れなくてもいいよ、というのがあるのです。大事なことはお客さまに合わせるということです。小学校の場合には、お客さまというのは6歳から12歳までという、非常に限定された子どもたち、およびその子どもたちの世話をしている大人です。中学の場合は、もっとすごいです。13歳と14歳と15歳しかいません。これは公共図書館などに比べると、非常に異常な世界です。中にいるとそれが分からなくなりますが、最初に行ったときには異常だなあ、と感じますよ。

小学校でも中学校でも高校でも、仕入れる本、棚の作り方、分類の仕方などが少しずつ違ってきます。基本というかスタンダードはありますが、学校によってもまた少しずつ違います。しかし、それをこの8回の講座で教えることは不可能です。

私は、いま小学校用の非常に簡略化した十進法を使っており、それを図書ボランティアの人たちに教えるのですが、それだけで1日を使ってしまいます。いま、本にはどういうものがあり、どういうものを集めなければならないかといった本自体の細かいことがありますね。その講習をやると、絵本だけで1コマ、幼年文学で1コマ、中学年で1コマ、高学年で1コマ、ヤングアダルトで1コマ、教わる本で1コマ...というふうに作っていったら際限なくあるわけです。

ですから、皆さんが、どうしてもそこまでやりたいということであれば、自分たちで自主的に取り組むしかない、と思います。区がそこまでお金を出して

くれるとは思えないけど…。でも、本当は、仕事となれば、そういう細かい技術を知らないといけないものではないですか。分からなかったり、知らなかったりすると、間違っていること自体に気がつかないわけですよ。いま、全国の学校のボランティアが入っていて、良い話も悪い話もあります。十進分類を知らないボランティアさんが入ってきて、自分たち独自の分類法で勝手に2万冊全部分類してしまったという話も聞いています。その後、学校司書の人雇われて入り、それを直すのに1年半もかかったそうです。知識がないのに、ないということ認めないボランティアは困るのです。何か分からないことがあれば、私達は基本に戻りますよね。ボランティアの基本は何かといえば、何のために、だれのためにやっているか、ということです。

こういう仕事をしてしていると、優れた先生にも数多く会いますが、とんでもない先生にもよく出会います。本当に声を大にして言いたいね。「いったいあなたはこれをだれのためにやっているのか？ 子どものためなのか、それとも自分の面子のためなのか？」と。校長先生がやりたいとおっしゃったのに、全職員が反対して図書室の改装をできなかったところもあります。市長がそのための予算を組むと言ったのに、そんなことをすると仕事が増えるといって教師が反対してつぶれた例もあります。全部の学校に正規の司書を送り込んだ町もあります。いまの政府は、市町村に行政を丸投げにしようとしていますので、その町の行政マン、役所の人間がどれだけ優秀かによって、町の運命は決まってしまう。いまの日本は、昔と違って自由に引越ができますから、これからはろくでもない町からはみんな逃げ出すでしょう。

全国各地を飛び回っていて、「あ、これはすごい」と優れた行政マンがいるところは分かっちゃうんです。たとえばね、ろくでもないホールがない。ひどいところはなんでこの町は体育館ばかりが立派なの？ 図書館もないのに…なんですね。今、おもしろいと感じるのは、人口5千人から2万人くらいのところで、腕の立つ、頭の切れる公務員が一人か二人いるところです。次から次へとアイデアを出し、一方でしっかりお金儲けもして、一方で町の人をきちんと守る。町にも図書館と同じくブレーンが必要だということです。頭が良ければそれで良いとは言いませんが、いままで他の人が考えなかったようなハウツーを考えないと、これからの行政マンはやってゆけません。

私の図書館における活動は今年で3年目に入りますが、最初の1年間は図書室の整備をするので精一杯でした。この間はボランティアさんの力を借りないでやりました。なぜかといいますと、人に来ていただくと、その人のために仕事を作らなければならないからです。作っている最中は人に仕事は頼めません。そこで、国分寺の方から使える人をスカウトして、二人で毎日のように働きました。毎日のように学校に行き、毎日のように給食を食べていました。その間に、学校というものが徐々に分かってきたわけですが、毎日通ったということが大きかったですね。1週間に1度程度ではあそこまで早く理解することはできなかったと思います。そして、2年目には、図書主任の先生がPTAの中から、この人ならできそうだという人を10人紹介してくれました。いろいろ

事情があり、最終的には5人になりましたが、その人たちにはルーティンワークの仕事を教えました。図書館も綺麗になり、そうすると子どもたちも汚さなくなりました。

そして3年目には図書ボランティアを公募しました。私達に、だれでもいっしょに、と言えるだけの実力がついたわけです。そして集まった人たちに、その5人の人たちが先生になって、ブッカーのかけ方などの仕事を教えます。うちのボランティアでは自主性を重んじます。だれも命令しません。自分で仕事を見つけない限り、未来永劫仕事は来ません。「これはどうやってやるんですか？」と聞かれない限り、だれも教えません。というわけで、命令されないといけない人はそれで落ち、いまは自主性のある人だけが残っています。そして、私の方はルーティンワークから解放されたので、去年あたりから授業も始めました。4年生を相手に百科事典を使う調べ学習の進め方を1コマやりました。先生たちには調べ学習のハウツーがないんですよ。子どもたちの相手をしていて分かったのですが、彼等は百科事典の目次を知らない、索引を知らない...えっ、だれも教えていないの？ と思ったら、その通りだったのです。そうか、ここから教えなければならぬのだということが分かったわけです。去年は、ちょうど国語の研修年間に当たっていて、子どもたちが子どもたちを相手にしたブックトークをやりました。それは大変おもしろいものでしたが、そのせいで大量の子どもたちが図書館に出入りしました。そこでもいろいろ発見をしました。いま子どもたちの最大の悩みは司書が常駐していないので、レファレンスができないことです。私は水曜日に行きますが、行くと廊下で子どもたちが待っています。「本のことはかんこさんに聞けばなんとなるんだ」ということが浸透してきたのですね。「聞いたら答えてもらえる」ということが分からなければ、聞きたいという気持ちにはなりません。もうひとつ分かったのは、だれか大人がいないとリクエストに対応できないということ。毎回毎回変わる図書委員では、リクエストに細かく対応するのは無理です。そんななかで、子どもたちは、痛切に司書の必要性を感じるようになってきました。

今年は、6年生相手に百科事典の使い方と調べ学習のポイントの授業をやりました。「お願いだから、公共図書館のカウンターで『縄文時代...』とボソっと言うのはやめてね。それを200人にやられたら図書館員は大変なのよ」と... (笑)。ポイントだけでなく、子どもたちは、起承転結の整った文章がしゃべれないんです。親と一緒に図書館に行って、親が図書館員に「この本はどこにありますか？」という会話をしているのを聞いている子どもは、「あ、ものを聞くときはこういうふうにすればいいんだ」ということを学習して、自分でもそういうふうに言ってみて初めて定着するわけです。そういう経験をしていない子どもはどういうふうに言ってよいか分からないわけですね。

今年1年生には、この図書館では文学をどのように分類しているかというオリエンテーリングをやりました。みんな30分で飲み込みました。2年生になったら、400番台、自然科学の分類をやると思っています。自然科学の分類は4桁になっていて大人は難しそうに感じますが、図鑑が好きなのは3年生まで

なのです。そこが教える絶好のタイミングなのです。といったように、子どもの特性に合わせてハウツーを考えないと失敗します。こちらのハウツーに子どもを合わせるとするのは無理なのです。こちらが子どもの体に合わせてカリキュラムを作ればいいんです。そのためには、まずこちらに何を伝えたいかというものがなければなりません。45分という限られた授業の中で、どのように組み立てればよいかのかを考えなければなりませんよね。

図書館学の基礎で、子どもたちに必要なことを全部入れるために、1時間目にはこれをやり、2時間目にはこれをやろうというプログラムを作ろうと思っています。そこまでいって初めて図書館らしくなるわけです。でも、それには専門知識が必要でしょ？ ただ指導をするだけなら、バナナの叩き売りと同じで、口上を覚える、つまり45分の授業を丸暗記すればいいわけですよ。でも、その授業を最初に組み立てるのは難しいよね。知識がなければできません。だから、いま私が作ろうと思っているのは、そういう“上げ底司書”と“上げ底図書館”です。だって、今は、それしか方法がない。プロの人を雇ってくれないですから…。

皆さん方がきちんとやりたいのであれば、夏休みに司書コースに通って司書の資格を取ってくればいいんです。とりあえず、それで枠は入ります。でも司書コースというのは図書館学について学ぶだけです。実際に“お客さま”の前に立ったときに役に立つことは何ひとつ教えてくれません。最近の実習もなくなりましてから、司書の資格を取って公共図書館に入ってきた人たちでもブッカーひとつ掛けることができません。分類カード1枚も書けません。お客さんに対してどういうふうに向かったらよいか、どういうふうにしゃべればよいか、というのは、ほぼ徒弟制度のようなものです。カウンターで先輩がやっているのを見て物まねでやってみるしかない。実務に関しては何も教えてくれないのです。特に児童文学などは図書館学のなかでは鬼っ子です。図書館学をやっている人はほとんど大学の教師です。大学の先生が図書館で思い浮かべるのは大学の図書館で、お客さんで思い浮かべるのは大学生なのです。5歳の男の子が絵本を抱いてやってくることは、彼等の頭にはありません。自分の専門しか分からないという人が多いのです。そんな訳で児童文学に関してはほとんど教えてもらえません。しかし、絵本だけでも最低3千冊を読んでおかないと仕事になりません。1日5冊読むとして何日分？ 丸々3年だね！

小学校というのは社会学も自然科学も乗り物も恐竜も絵本も幼年文学も、全部必要です。オールマイティ、全部必要ということですね。で、中学にゆくと、学校で学ぶこと以外は文学に集中しますから、とりあえず50%文学やっていけばもつんですね。でも、小学校の場合は、消防署の仕組みなんてところから始まって、法律の本も経済の本も、動物も植物もペットも、なにかもが必要なのです。しかも、新しい本が毎日出ます。使える本が出たら頭にインプットして、使えなくなった本を頭から追い出さなければなりません。毎日データの更新をしなければなりません。

というようなわけで、このことが分かっていると、「ボランティアをやりたい

いのですけど...」といらした時に、「どうしたものか...」と考えてしまうわけです。まずは、皆さん方が、「自分はどこまでやりたいと思っているか」ですね。もちろん、やりたいと思ってもやれる場所があるとは限りませんが...。とりあえず私は、上げ底ができるようなテキスト、ハウツー・リストといったものを作ってゆこうと思っていますが、本当はそんなものがなくても、プロの司書が一人ずつ配置されればいいのです。そうでないと業務ができません。レファレンスとリクエストに対応できなければ図書館とは言えません。まあ、それでも百歩譲って、古い本が片づくのはマシ...といった方向で考えるしかないといまは思います。

そこで私が今やっていることは、一応の器を作ってしまうことです。そこを預かる先生方が素人ですから、必要な本とそうでない本の見分けはつきません。ですから、不要な本を全部抜いてしまい、きちんと分類もして、後は新しい本を入れてそこに配置すればいいという状態の器を作ります。私がやっている“改装”の内容とはそういうものです。そういうふうにして、子どもたちにとって居心地の良い空間を作ると、子どもちは「ウワァー」と言います。今まであったけれど目に付かなかった本が見つけれられるようになるので、それを読みます。

ある学校に関わったとき、そこには学校司書がいたのですが、新しい本を買って、入れるところがなくなると本棚を買うんです。でも、部屋のサイズは限られているわけです。本棚を入れたら図書室が膨張するわけでもないのにね。読めない本の中に新しい本がちょこちょこあっても、どこにあるのか分かりません。それらを抜いて器を作ったのです。その人は使えない司書ではないのですが、相談できる相手がいないので、思い切って仕事ができなかったのです。器を作ればきちんと回ってゆくというのが分かったので、彼女が使いこなせるように直したんです。その後、毎月貸し出しは倍になっています。新しい本を入れていないにも拘わらずです。

また、最近関わり始めた小学校の例ですが、ここは予算が少ないので、本が少なく、棚はガラガラです。そういうところでは、まずインテリアコーディネートをやります。それもただのインテリアコーディネートではなく、本を知っているインテリアコーディネーターでなくてはならない。部屋のサイズ、色合いに合わせてコーディネートしなければなりません。学校には予算がないから備品が買えない。カーテンが買えない。イスも机も買えない。本棚も買えない。というわけで、全部やり方を変えなければならぬわけです。金太郎アメのように、こうやったらできますよ、というハウツーを作るのはとても難しいことです。私の場合は、現状を見てから考え始めるのです。学校中を走り回り、何か使えるものはないかと必死に考えるのです。理科室で余っていた箱にペンキを塗ってイスにしたりと、貧しい作業をするわけですよ。

30年前の日本では本は文学が中心でした。だから、小学校の図書館ではほとんどが文学書架です。小さな本しか入らない。でも、最近の本は8割がA4版です。伝記や歴史の本だって、いまは大きいのです。だから、まず本棚がな

い。横に倒してして入れるしかない…。図書館専門用品を扱っているお店というものがありませんので、さまざまな店を回って使えそうなものを探すわけです。そして、購入して図書室に置いてみて、子どもがどのように使うかを見て判断します。

次回の講座では、皆さんに実際に本棚の整理をやっていただきます。整理というのはお掃除ではありません。すでに入っている本をどのように整理して、きれいに見えるように整頓するかということが課題です。これをすると大きな効果が見られます。もちろん、本格的な整理というのはまた別です。本格的に行うときには、全部の本を一旦抜き出して、本棚を動かして、後ろに溜まったゴミを集めたり、天井も綺麗にします。学校というのは非常に汚れています。カーテンも洗濯して掛け替えたり、電気の笠や窓ガラスの汚れを取ったりと、文字通りの大掃除です。図書館が見違えるように美しくなります。それが第一段階です。第二段階は、使えなくなった本を外に出したりします。第三段階は、どこにどの本を並べるか、本の分類と配置決めです。同時に内装も行います。

学校の図書館というのは生徒の生活を支えるものだと思います。学習のためだけではなく、「本を読むとおもしろいことが起きる」と思っていて欲しい。本を読むことに慣れて欲しい。運動不足の子どもをいきなり富士登山に連れていくなんで無謀ですよ。富士山のとっぺんからのあの美しい風景を見せたい、と思ったら、まずはウォーキングからですよ。そしてジョギングもやって、ちょっと頑張ったら連れていける、というレベルに達したら連れていくんです。そうでなければ山登りが嫌いになるではないですか。日本の学校は、泳ぎ方も教えないくせに、25メートルを泳げと言うのです。調べ方も教えないで、調べ学習をしると言う。そうしてできなければ、「お前が悪い」と言う。

私は小学校の図書館というものは、お客さまは、字も数字も読めない、というのが基本で、そして「ここには、私の読む本は何もないんだよ」と、どんな子どもにも思わせてはならないと考えます。また、“公共”というのは貧乏人のためにあると思う。金持ちは自分で図書館を作ればいいではないですか。家で本を買ってもらおうお金がなくとも、学校に行けば勉強ができる。そのために“公共”があるのだと、私は思います。

優れた本だけを集めた図書室を作って、「ほら立派な図書室でしょ。これが読めるようにならなければダメよ」と言って落ちこぼれを作るようなやり方には反対です。だれが一番図書室を必要としているか？ それは勉強のできない子どもたちなのです。本が読めない子どもたちにこそ、一番図書室が必要なのです。「本の好きな、良い本だけが読める子どもが好きなんです」という図書主任は困ります。

エンターテインメントから入って、本を扱うことに慣れ、本を読むことに慣れ、大量に読むことに慣れ、勉強の本を読むことにも慣れてゆく。子どもというのは、特に小さい子どもは共感能力が高いのです。先輩が獲得した性質は、後輩が、自分がやってなくても受け継ぐんです。あれは不思議だね。いまの2

年生の方が3年前の2年生よりも本が読めるのです。先輩たちが獲得して性質を継承してゆくのです。

皆さんがどこまで学校図書館に関わりたいか。それがまず一番目のポイントです。掃除だけ、でもいいんです。掃除をしていただくだけでも学校は大変助かるだろうと思います。でも、目標はもっと高いところにあるはずですよ。

Vol. 2

学校図書室見学(1)

～福生市立福生第二小学校～

2003年5月29日(木) 10:00～12:00

【福生市立福生第二小学校の概要】

所在地：東京都福生市熊川623

校長：本村 誠

学級数：19クラス

児童数：592名

教職員数：29名

(平成14年7月1日現在)

1. 福生第二小学校・図書室の紹介(赤木かんこ氏)

<参考>

専従の司書を置いていない同小は、近くに住む児童文学評論家・赤木かん子さんのアドバイスで3年前に図書館を改造した。まず、古過ぎる本や汚れた本を処分したうえで、蔵書の4割を新たに購入。館内を模様替えし、子どもたちが探しやすいように本の並べ方を工夫した。たとえば、図書館の十進分類法にこだわらず、「文学」をホラーやミステリーなどのジャンルごとにまとめた。また、分類番号の代わりに知人のイラストレーターがデザインした126種類のイラストラベルでジャンルを表示した。その効果あって、改造前に9,000冊だった年間貸出冊数が改装後は2万冊になった。

この学校も他の学校と変わらず、ふんだんに予算があるわけではなく、第二図書館として部屋は提供してくれたのですが、本棚はいただけませんでした。仕方がないので自分で本棚を作りました。

「社会科学」(私たちの社会がどういうシステムで動いているかを書いたものです)、初めの方にくる分類は、政治・法律・経済です。十進分類法を覚えていただくと、こういう話がストレートに通じるようになるので楽なのですが。

次に入れてあるのが、「工業と産業」です。政治、法律、経済、仕事、それと公共サービスに工業と産業を足すと丸ごと“日本の暮らし”1セットの完成です。それが2本分の棚に収めてあります。その隣の2列の棚が「心の問題と人

体」です。心と体です。ですから、いま小学校が盛んにやっているボランティアとか盲導犬や手話関係の本はそこに入っています。

また、この部屋の後ろにあるのがランドセル入れです。それを本棚として使うために牛乳パックを利用したブロックと布でストッパーを作りました。こういうものを作るときのコツは、子どもが決して触りたがらない絵柄を選ぶということです（笑）。子どもの皮膚感覚に合わないことをすると、小学校ではうまくゆきません。子どもの皮膚感覚は天からの授かりものですから、それを变えることは無理です。まわりをじゃませず、子どもが触りたくない絵柄や色を選びましょう。また、本を並べるときには、エネルギーは上から下に通します。横に通さないというのがコツです。

そうして国語はさまざまなジャンルに細かく分けることができるので、このランドセル入れを使い、ここでは、事典が3段、国語辞典も3段、後はことわざ、古事記、符号、方言、百人一首などを1段ずつ使って並べています。こうやって整理すると、どのジャンルの本が足りないかが一目瞭然になるので、新規購入の際に便利です。ただ、いま百人一首の本が少ないのは、元々少ないのではなく、ごそっと借りていかれたせいですが…。また、最近の話題として、低学年用の辞書が出ました。今までは、国語の辞書は4年生からしか使いませんから、低学年用のものはなかったのですが、調べ学習が言われ始めたので、ついに発行したのです。

窓側の棚には、歴史と伝統、考古学が並んでいますが、ここに至っては、まず本棚がありません。用務員さんに作ってもらうことになっています。廊下側には世界の言語関連の棚も作りました。ここには世界中の言語本を集めようと思っています。たとえばこれはインドネシア語で書かれたドラえもんの本です。結構借り手がいます。また、これは一見英語に見えますがアイルランド語です。ここ福生市には外国の方が多く住んでおられ、そのお子さんたちも学校に通ってきますので、その配慮もあります。まあ、子どもたちはすぐに日本語を覚えますけどね。

また「世界の暮らし」というジャンルでの本を整理してあるのもこの特徴です。料理の棚で世界の暮らしが調べられるとか、ファッションのところに行けば地方の生活の話が出ているかもしれないといったことは、小学生ではまだ思いつくことができないのです。というわけで、授業で世界の暮らしをやっているときには、料理やファッションなどの本もすべて世界の暮らしの方に入れておきます。

こういうやり方をしますと、昔気質の図書館員の方は嫌がります。十進分類法に従って本が並んでいないと嫌だと。けれど、学校図書室はスペースも小さいので、そのやり方でやると“倉庫”になってしまうのです。子どもたちに使いやすい図書室を実現するためには、十進法の壁を飛び越えなければなりません。なかなか飛び越えさせてくれません。

また、こういうふうなジャンル分けで本を整理している学校は少ないでしょう。なぜなら、本が足りないことが分からないからです。でも、こうしてみる

と、足りない本がよく見えますよね。本棚で空きがあるところは、子どもが触っている（利用している）ところで、綺麗に整理されたままのところは、利用されていないところ...そういうふうに見ることが大切です。

この第二図書室の充実は、まだこれからというところですが、完成するには180万円が必要です。本棚の1段分で約8万円が必要なんです。とすると、1つの棚は4段ですから、1本（棚）で32万円分の図書費がかかるわけですね。10本あったら300万円です。いま、小学校の図書室で一応きちんとした本を集めようとする650万円必要です。なぜなら、今は文化の変わり目で、今まで使っていた本が役に立たなくなってしまう、新しい本を購入しなければならないというのが一番大きな要因です。文化に大きな変化がない時代には、本を買い足してゆけばよいだけで、30年前の本でも使えますが、文化の変わり目が来ると、いままでの本が一斉に使えなくなってしまう。

困るのは大判サイズの本が増えてきたことです。でも、この第二図書室の方は窓（大きさ）に合わせて本棚が作ってあるのです。これ以上大きくできません。加えて新しい予算がない。既製品の本棚にも欲しいと思うモノがありません。どこのカタログを見ても、良い本棚がありません。日本のメーカーは大学図書館をイメージして製品を作っていますので、重厚で使いにくいのです。これを使うと非常に無骨な図書室になってしまいます。この白い本棚は元々茶色でしたが、白く塗り替えてもらいました。それだけでも部屋がパァーと明るくなりました。今、「小学校向きの可愛い本棚を作って！」とメーカーをせっついているところですので、うまくゆけば秋頃には出来るかもしれません。

というわけで、とりあえずは、今あるものを使うしか手がありません。となると、一つの本棚で上と下とで違うジャンルの本が並ぶこともやむを得ませんが、そこでエネルギーが切れてしまうのです。また、一つのジャンルは30年もすると消滅しますが、図書館には「別置（べっち）」という考え方があります。十進法は別として、とりあえず、今このジャンルが流行なので、このジャンルの本を集めておこうというやり方です。たとえば、封神演義に関する本がブームだとすれば、大人向けの本も、子ども向けの本も、ぜんぶ一カ所に集めておくわけです。これを十進法に従って整理すると、バラバラになってしまいます。一カ所に集めることで貸出率も高くなります。お客さんの時間と無駄を省くことで貸出率は上がってゆくのです。封神演義のブームが終わったら、そこでまた元に戻せばよいのです。普通のブックフェアは1か月単位ですが、半年単位でも1年単位でも、半永久的でも構わない。私は、小学校の図書室では、「雰囲気を作る」ことを重点的に考えて、ジャンル分けを重視しています。

十手のマーク（時代劇）のところには、『バガボンド』（注）は難しいので、代わりに『伊賀の影丸』を入れました。中学なら『バカボンド』、吉川英治の『宮本武蔵』、ポプラ社が出している子ども向けの『宮本武蔵』、さらに司馬遼太郎と山田風太郎を入れると立派な時代劇のジャンルが出来ます。

(注) 『バガボンド』：井上雄彦作、平成12年度文化庁メディア芸術祭のマンガ部門で大賞受賞。＜受賞理由＞豊臣から徳川へ、大きな時代のうねりの中で、少年期から青年期を迎えた宮本武蔵。その強さから獣にも擬せられる武蔵を放浪者(バガボンド)として井上氏は描く。国民文学といわれる吉川英治原作にあえて挑戦した作者の自負が、スピード感あふれる絵によって見事に結実した。

時代劇というのは半分がミステリーなんです。いわゆる“捕物帖”ですね。というわけでミステリーの側に置いておくのが都合が良いのです。SFの棚には『ドラえもん』が65冊ありますが、そのうち64冊が貸し出し中です。図書館というのは、今ここにある図書のうち、何が借りられているかを優先させなければなりません。本を購入する場合にも、この本を入れるとどれくらいの需要(借り出し)があるかを計算して購入するのです。

こちらはファンタジーの棚ですが、偕成社の『南総里見八犬伝』が入っています。この本は分類からすると古典に入りますが、内容から考慮してファンタジーの棚に入れました。これは日本を代表するファンタジーです。

また、大人が、子どもがワクワクするだろうと思うような本は、実は二番手三番手だと思って下さい。おばさんが読んで、何これ？ というような本が子どもの大きな支持を受けたりするのです。自分の皮膚感覚を基礎にして考えないでください。

ここにあるのは“ヤングアダルト”本です。これは「不幸な子どもたちが主人公」の本です。困ったときに、お父さんもお母さんも助けてくれないということが分かった子どもたちの本です。とって、自分で問題解決するほどの気力も体力もない...そういう子どもたちが主人公の本です。最初にこの種の本が出てきた時には、あまり注目されませんでした。次第にその量が増えてくると、旧勢力を圧迫するようになります。旧勢力の代表は何かというと『ずっこけ三人組』(那須正幹著)です。というわけで、ヤングアダルトのコーナーを作ると、ここには新しい子どもたち、新しい問題、新しい解決方法...という本が並びます。そして、ヤングアダルト系はさらに量が増えてくると把握するのが難しくなりますので、さらに細かくジャンル分けしてゆく必要があります。そのうちヤングアダルトがほとんど100%になれば、これはヤングアダルトだと言い張る必要がなくなります。

これはヤングアダルトだと、誰に対して言い張るのか？

旧勢力に対してです。私は、あと5年くらいでそうなると考えています。

中学校の図書室を作るのは非常に簡単です。現在本屋さんに平積みされている本を根こそぎ持ってくればそれで完成です。今は10歳になるとヤングアダルトで、35歳くらいまでヤングアダルトです。最近の公共図書館では、ヤングアダルト・コーナーを作りました。でも、そこに20代と30代の人に来てしまう。

特に今は仕事がないので、朝から晩までいらっしゃる（笑）。そうすると中学生や小学校の高学年が入れなくなる...という現象が起きています。私は、3年くらい前に、たぶんそうなるだろうなと思っていましたが、実際にそうなっていますね。そうなると、シニアのヤングアダルトとジュニアのヤングアダルトの机を分けてあげないと大変です。また、最近の傾向で言えば、ファンタジーは20代に乗っ取られています。書店で、ハリーポッターなどが大人の本の方に並んでいるのは、そういうことです。

ここはホラーのコーナーですが、この図書室には司書がいませんので、マンガであっても、内容がホラーであれば、ホラーコーナーに入れます。そうしないと、マンガの棚がぎゅうぎゅう詰めになってしまうからです。また、子どもたちも、その方が本を探しやすいということが言えます。子どもたちが大人の手を借りなくとも、読みたい本を探し当てられるようにしてあげることが大切です。また、マンガは少々乱暴に扱っても大丈夫なように、すべて糸綴じをするなど補強してあります。

よくご覧になっていただきたいのは、いわゆる“旧勢力”に相当する本は、ここには4段分しかありません。他の学校なら、ほとんどがこれらの本で、30段分くらいあります。でも、それはとても入りきらない。それに、ほとんど子どもたちも、ここにある本は読みませんね。旧勢力との線引きということですが、それが難しい本もあります。たとえば、斉藤洋の著作ですね。現実の子どもたちを主人公にして幸福な話を書くと現実感がない、かつ、鬱陶しい...。実際には幸福な子どもは存在するのですが、それをそのまま書くと現実味がないのです。それを斉藤洋は動物を主人公にすることで解決しています。彼が編み出した手法です。昔から擬人化という手法はありますが、斉藤さんは動物を人間世界に引っ張り込むということをしています。たとえば、シロクマの兄弟が人間の街にやってきて宅配便屋さんをする話などですね。それを誰も不思議に思わない、この世界は何なんだろう...（笑）。でも、これとハリーポッターが一緒になるかということ、ちょっと具合が悪い。そこで、この図書室では、斉藤洋作品は旧勢力の方に置いてあります。

催しのひとつとして、今月のブックフェアというコーナーも設置してあります。今月のテーマは“水”で、水に関係のある本を選んで、ここに並べてあります。

2. 実 習

今日、これから皆さんにやっていただくのは、本棚の縁に合わせて本を入れるという作業です。これが「面（つら）合わせ」で、“棚みがき”と言っています。そうしますと、本棚に空きが出来ますね。そこで、本の中から表紙の美しいものを選んで、表を向けて並べます。これで完成です。でも、どの棚も同じように並んでいると美しくありませんね。というところで、“センス”が問

われるのです。上手な人がやりますと、とても格好良い棚が出来ます。そうでない人がやりますと、ノタクタして見えます。それは、ブティックで、洋服を格好良く畳んで棚に入れることができる人と、それができない人との差と同じです。このワインレッドの服は上の棚に置いた方が素敵に見える、といったようにセンスの良い人は無意識に入れ替えをしているわけです。中に入っている本はまったく同じなのに、並べ方ひとつでまったく表情が違うものになるのです。子どもたちが本を読みたくようになるようにすることです。その際、その棚にあってはならない本は抜き出して、元の棚に入れます。

間違いやすいのは、“星”マークです。これは星の本という意味ではなく、占い関係の本です。SFコーナーにドラえもんを入れた時には、これはマンガであるという子どもたちとの間で論争になりましたが、ドラえもんはSFであると押し通しましたので、子どもの方が折れて、SFコーナーに返すようになりました。続いて、『キン肉マン』をスポーツコーナーに入れようとしたら、「かんこさん、これは“友情”なんだよ！」と言われたので、あっさりマンガに戻しました(笑)。というように、子どもたちがシールに慣れてくると、これは間違っている、というご指摘を受けることがあります。しかも、だいたい、それは当たっていますね…。

女の子からの要望で、雑誌も置くようになりました。こちらは本棚ではなく、マガジンラックに入れてあります。といっても、本当はこれはコップ立てなのです。大人向けのマガジンラックは仰々しくて使えません。また、この机にはとりあえずのテーブルクロスが掛けてありますが、もっときちんと統一したら素敵になります。今は、子どもたちが好きな色や柄をテストしている段階なのです。低学年の女の子が好きなのはやはりピンク柄です。これが可愛い！

と言います。私の趣味とは違いますが、私の趣味で作ってしまうと子どもたちは迷惑をするということです。男の子はテーブルクロスなんて邪魔くさいやという感じですよ。

図書室の本の揃え方には軟派なものから硬派なものへという方向と、その反対のやり方がありますが、ここでは軟派なものから揃えていくことにしています。とにかく読書力をつけてもらいたいからです。それには乱読するしかありません。大量に読まないで読書力はつきません。でも、読みたいものしか大量には読めないのです。読みたい本を大量に読みますと読解力がつきまでするので、いざ調べ学習で本を読む必要に迫られても、対応する力がついているのです。勉強用に読まなくてはならない本だけを読ませて読書力をつけさせるのは無理です。ハードルが高過ぎます。

では、皆さん、好きな棚に行って“棚みがき”を始めてください。ノルマは、一人二段です。
(実習作業入る)

せっかく“棚みがき”しても、また子どもたちがやってきて、壊してしまいます。でも、それに負けないで、また整理する、このような作業をフロアワークと言いますが、これをやることによって、ああ、この本は人気あるな、この本は読まれていないなということが分かってきます。また、この本はもう古くなったから抜こうとか、そういうことも同時に行っているわけです。

次は本の補強技術をやります。中心は糸綴じです。実技を教えるのは時間がかかりますので、私がやりますが、ご希望があれば、次回は実技だけの講座をやりたいです。

(赤木さんによる糸綴じ及びブッカー掛けの実演入る)

図書館員は何でもやらなければならないんですね。お掃除もうまくできて、ビジュアルセンスもあって、本の知識もあって、本も大量に読んでなければならず、かつレファレンスもできなければならず...、でも、第一歩は掃除です。掃除と廃棄です。壊れていない本を捨てるのは学校の先生方には抵抗があるらしく、こんなに捨てるのか！ というようなことを言われましたが、廃棄後、子どもたちが図書室に来て、「あっ、本が増えた！」と言ったのです。1冊も購入していないのに...。これで先生方もやる気になり、合計6,000冊廃棄しました。でも、部屋のサイズも本棚も限られていて、しかも居心地の良い図書室にするには、廃棄作業が必要なんです。本が増えたら本棚を買うのではなく、捨てるしかないのです。最初からこの部屋に入る本の分量は決まっているのですからね。

3. 質疑応答から

受講者：「ブッカーの掛け方」といったような、図書館活動に必要な技術を取得するための本はありますか？

赤木氏

図書館業界というのは、プロしか相手にしないのです。そういった本を誰が出しますか？ こんなことは易しすぎて、プロは教えるのもバカバカしいでしょうね。もちろん、本格的な装幀の教室といったものはありますが、それはその道のプロを育てる教室です。図書館というのは、徒弟制度の世界で、先輩がやっていることを見て学ぶところなんです。自分たちで教えてくれる人を捜してきて、教室を開いてもらうとか、自主的に取り組む必要がありますね。見ているだけでは身につけません。実際にやってみないと技術は習得できません。でも、皆さん、そこまでやる気が本当にありますか？

さらに深く学校図書館に入り込むには、技術以外に知識も必要です。低学年向けの図書について2時間、高学年向けの図書について2時間、ヤングアダルト向けの本について2時間というように学習しないとダメです。それが理解できると、書店に行っても図書館に行っても、目当ての本が目飛び込んでくるようになります。でも、そのためには講師を呼んでこなればなりません

ね...。技術にせよ知識にせよ、身につけるにはお金も時間もかかります。ですから、ここから先は、皆さんが、どれだけの時間とお金をかけることができるか、その覚悟次第にかかっていると思います。これは市民講座ですから、講座を受けている皆さんが、これからどうしたいのかを話し合っカリキュラムを組めばよい話ですよ。

受講者：非常にマンガ本が多いように思いますが...

赤木氏

特にマンガを意識しているわけではありません。この棚にどのような機能を持たせるか、そのためにはどんな材料（本）が必要かを考えるのです。写真集でもマンガでも活字本でもいいのです。スポーツ関係はほぼマンガです。だって、たとえば野球がどんな楽しいかといったことを書いた活字本がないのですから...。でも、子どもたちが要求するマンガを見ていると、非常に健全なものがあります。私は、子どもたちの本を見る目を信用してもいいと思いますね。